

カブリダニ利用上における 二つの懺悔(ごんげ)

東海物産株式会社 技術顧問 (元野菜茶業研究所 上席研究官)

浜村 徹三 (はまむら てつぞう)

ハダニ防除にカブリダニを利用することをテーマに、約40年間、研究・普及活動を続けてきた。研究者として現役時代に出したデータが、現場で実践する中で誤りであると気付いたことが二つあった。これからの利用にも関連することなので、懺悔の筆をとることにした。

一つ目はカブリダニの高温耐性についてである。チリカブリダニとケナガカブリダニについて、30℃を超えると発育できないというデータをいくつかの論文、雑誌に報告してきた。ところが栽培現場においては、初夏のイチゴ親株や苗床でチリカブリダニ、ミヤコカブリダニが卓効を示したり、真夏のガラス室のナスでもミヤコカブリダニが有効であったりして、暑さのためにカブリダニの利用ができないというのは誤りであると言える。

これまでのテストの多くは、恒温や恒湿条件であり、変温や変湿条件がカブリダニの発育に及ぼす影響を十分

に解明できなかったことが、高温では使えないという誤った定説ができてしまった原因と考えられる。これには我々の論文も一役かっていたと思うので、お詫びを申し上げる次第である。個別のテストでは高温条件は不適であっても、現に夏場も有効なことから、現場第一主義を取って夏場のカブリダニ利用を奨励したい。高温でも利用可能ということは、カブリダニの利用範囲が広がることを意味しており、IPMのさらなる発展を期待したい。

二つ目は気門封鎖剤のカブリダニへの影響についてである。ハダニやカブリダニへの薬剤の影響を調べるテストは、回転式薬剤散布塔(みずほ理化製)を使って行ってきた。この機器は一定の圧力と付着量を決め、30cmほどの高さから筒内で噴霧するもので、画一的に公平なテストをするうえでは便利なものであった。この方式のテストでは気門封鎖剤はカブリダニを殺すことはなかったので、カブリダニに影響のない薬剤として位置づけてきた。ところが動力噴霧器を用いて気門封鎖剤が多量に散布されたバラ園で、チリカブリダニ雌成虫がコロコロ死んでいるのに出くわした。どうも、散布器具、圧力、濃度、量等の条件によって、カブリダニが悪影響を受けることが明らかになった。最近はカブリダニと共用できる薬剤の一覧表から、気門封鎖剤は削除している。ただし、カブリダニの放飼前にハダニの密度を下げておきたい場合は、全く問題ないので、気門封鎖剤の散布を勧めている。

古希を迎え、ずっと気になっていたことを記して、筆を置きたい。

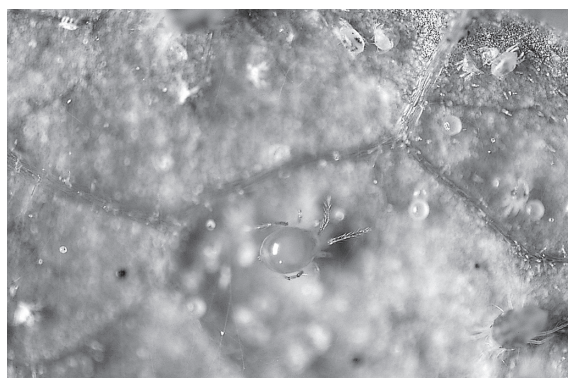


図-1 チリカブリダニ雌成虫